

巻頭言

抗 PD-1 抗体薬の実用化に思う

宿主にとって非自己であるがん細胞，移植細胞，ウイルス感染細胞などを認識して破壊する細胞傷害性 T 細胞の表面には，免疫チェックポイント受容体の PD-1 が存在し，T 細胞のブレーキとして機能している．一方でがん細胞は PD-L1 という分子を過剰に作り，PD-L1 は PD-1 と結合することにより T 細胞にブレーキをかけ休眠化させ，自ら T 細胞による攻撃から逃れて増殖する．免疫チェックポイント阻害薬である抗 PD-1 抗体や抗 PD-L1 抗体は，この PD-L1 と PD-1 の結合を阻害することにより T 細胞のブレーキを解除し，T 細胞にがん細胞を破壊させる．

T 細胞の表面に PD-1 が発現していることを京都大学の本庶佑特別教授らのグループが世界ではじめて報告したのは平成はじめの 1992 年であり，抗 PD-1 抗体薬ニボルマブ（商品名オプジーボ）が世界で初めて小野薬品工業から発売されたのは 2014 年であった．それまで有効性が疑問視されていた免疫療法は，抗 PD-1 抗体薬の実用化からわずか数年で外科手術，化学療法，放射線治療の三大がん治療を凌ぐ第四の治療法として確固たる地位を占めるまでになった．そしてこれらの偉業に対して，平成最後の 2018 年に本庶佑特別教授らにノーベル生理学・医学賞が授与された．世界的大発見の一部始終を平成時代に目の当たりにしたことは，研究者の端くれとして感に堪えない．

さて，広島国際大学看護学ジャーナルの第 16 巻を刊行することになった．平成時代最後の発刊となろう．このジャーナルから新しい時代を切り拓く独創的な研究やナイスステップな研究者が生まれることを期待してやまない．

2019 年 3 月

広島国際大学 副学長・看護学部長

島谷 智彦